第10課　主を礼拝する

【暗唱聖句】

「彼らも「主は恵み深く、イスラエルに対する慈しみはとこしえに」と唱和して、主を賛美し、感謝した。主の神殿の基礎が据えられたので、民も皆、主を賛美し大きな叫び声をあげた」エズラ記3章 11節

【日曜日・主に向かって歌う】

「エルサレムの城壁の奉献に際して、人々は、あらゆる所からレビ人を求め、エルサレムに来させて、感謝の祈りと、シンバルや竪琴や琴に合わせた歌をもって、奉献式と祝典を行おうとした。詠唱者たちは、それぞれエルサレム周辺の盆地、ネトファ人の村々、ベト・ギルガルおよびゲバやアズマベトの田舎などから集まって来た。詠唱者たちは、エルサレムの周辺に村を作って住んでいた」ネヘミヤ12:27～29

エルサレムの城壁の奉献式（落成式）の際に、人々はあらゆるところからレビ人を呼んで、感謝の祈りと共に楽器と歌とによる賛美をもって祝おうとしました。誰でも良いのではなく、祭司と同様に神様に直接使えるレビ人から構成されていました。現代においても音楽の奉仕者は、牧師同様に主に仕える気持ちを持って臨むことが大切であり、その讃美は主に捧げられるべきものであることがわかります。また歌を歌う詠唱者たちはエルサレムの周辺に村を作って、いつでもすぐに駆けつけることができるように待機しながら生活していたことがわかります。

「神の言葉をもった王の先見者ヘマンの子らは…父の指示に従って主の神殿でシンバル、琴、竪琴を奏で、歌をうたって神殿の奉仕に従事し、主に向かって歌をうたうための訓練を受け、皆が熟練した者であったその兄弟たちも含め、彼らの数は二百八十八人であった。」歴代誌上25:5～7

音楽の奉仕者はレビ人であり、同時に訓練を受けて皆が熟練した者であったと書かれてあります。音楽の奉仕者は、それによって会衆の気持ちを天に引き上げ、礼拝に相応しい雰囲気を作り上げていきます。従って、高度な技術が要求され、単に歌が好きだからという理由で加わるわけにはいきませんでした。天国においても、圧倒的な讃美が主に捧げられています。その雰囲気を作り上げていくのは、やはり選ばれた者たちなのです。

【月曜日・清め】

「祭司とレビ人は身を清めたうえで、民と城門と城壁を清めた」ネヘミヤ記12章 30節

城壁の奉献式において音楽の奉仕者たちが集まってくると、祭司とレビ人はまず自分自身の身を清めたうえで、民と城門と城壁をも清めたと書かれてあります。清めとは、「綺麗になること」、「純粋になること」を意味しており、神の御前に道徳的に綺麗で純粋な状態になると象徴的意味合いも含まれていました。

「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」ヨハネの手紙一1章 9節

祭司とレビ人の清めの儀式は、あくまでも象徴であり、目的を達成するための手段であって、それ自体が目的ではありません。その目的はイエス・キリストの血潮によって罪が赦され、神様の御前に清められたものとなることです。それは罪を言いあらわし、悔い改めることによって実際の清めを受けることができます。

【火曜日・二つの大きな合唱隊】

清めの儀式が終わった後、ネヘミヤは大きな合唱隊を二つ編成し、一隊は城壁の上を右へエズラを先頭に進み、もう一隊は左へ進みネヘミヤはその後からついて行ったことが記録されています。こうすることで、街のすべての人が、素晴らしい神への賛美を耳にすることができました。そして、二つの合唱隊は警備の門のところで再び合流し、そこから神殿の中へと行進していきました。音楽はまさに礼拝行為でした。民たちは、演奏されている間、顔を地にふせ祈ったのでした。聖書の中には音楽の礼拝における重要性について、たくさん描かれています。

モーセとイスラエルの民はエジプトを脱出した後、主を賛美して、『主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた…』」（出エジプト15:1）と歌いました。また、イスラエルがアンモン人やモアブ人たちとの戦いにおいては、主に向かって歌をうたい、彼らに軍隊の先頭を進ませ、「主に感謝せよ、その慈しみはとこしえに。」と賛美していくと、主は伏兵を向けられたので、彼らは敗れた（歴代誌下 20章 21、22節）と記録されています。さらに、黙示録15:2～4において、天国に救われた者たちが、「神の僕モーセの歌と小羊の歌とをうたった」と書かれてあります。賛美は地上でも天上でも高らかに捧げられる礼拝行為であり、神様の勝利と救いをたたえるものです。そして、驚くべきことに、地上の讃美と天上での賛美がつながっています。地上での救いの御業が天国でも忘れることなく覚えられており、わたしたちは神様を讃美し続けるのです。

【水曜日・礼拝の一部としてのいけにえ】

「その日、人々は大いなるいけにえを屠り、喜び祝った。神は大いなる喜びをお与えになり、女も子供も共に喜び祝った。エルサレムの喜びの声は遠くまで響いた」ネヘミヤ記/ 12章 43節

民たちは神様への讃美が捧げられた後、いけにえを屠り（殺し）、喜び祝います。その喜びの声は夜遅くまで響きました。いけにえを殺すという行為は、現代人からすると少し残酷な気もしますが、しかしそれは、「キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られた」（第一コリント5:7）とあるように、キリストによる救いを象徴的に表していました。だから最後には喜び祝うのは自然なことなのです。礼拝においては、神様に対する畏敬の念と共に、喜び祝いことが同時に起こるのです。

【木曜日・礼拝の一部としての祭司とレビ人】

「その日、礼物と初物と十分の一の供出物を蓄える収納庫の監督が任命された。こうしてそこに、律法が定めているように、祭司とレビ人の生活の糧を、町々の耕地から徴集して納めた。実にユダの人々は、祭司とレビ人の働きを喜んでいた」ネヘミヤ記 12章 44節

ユダの人たちは、祭司とレビ人の働きを喜んだとあります。祭司やレビ人たちの働きを通して、神様と深く交わることができ、救いの喜びをいただくことができたからです。その喜びが、什一などの捧げもの納めることで表されました。

「キリストは、既に実現している恵みの大祭司としておいでになったのです」ヘブライ9章 11節

また、特に大祭司たちの働きはキリストの天におけるとりなしの業を象徴していました。祭司の働きは天の働きとつながっていました。神様の働きが祭司たちを通してなされていきました。そのことが一層ユダの人々を喜ばせました。現代においても、教会での礼拝は、天とつながっています。そう信じて臨むとき、喜びがもっと溢れてくることでしょう。